

今週の為替相場見通し(2019年3月25日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.75 ~ 111.70	109.94	109.00 ~ 111.20
ユーロ	(ドル)		1.1274 ~ 1.1448	1.1300	1.1200 ~ 1.1350
(1ユーロ=)	(円)		123.83 ~ 126.78	124.24	123.00 ~ 125.50
英ポンド	(ドル)		1.3004 ~ 1.3311	1.3212	1.3050 ~ 1.3350
(1英ポンド=)	(円)	*	144.14 ~ 148.39	145.19	144.00 ~ 148.00
豪ドル	(ドル)		0.7058 ~ 0.7168	0.7080	0.6950 ~ 0.7200
(1豪ドル=)	(円)	*	77.78 ~ 79.42	77.84	77.00 ~ 79.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1)今週の予想レンジ: 109.00 ~ 111.20 円

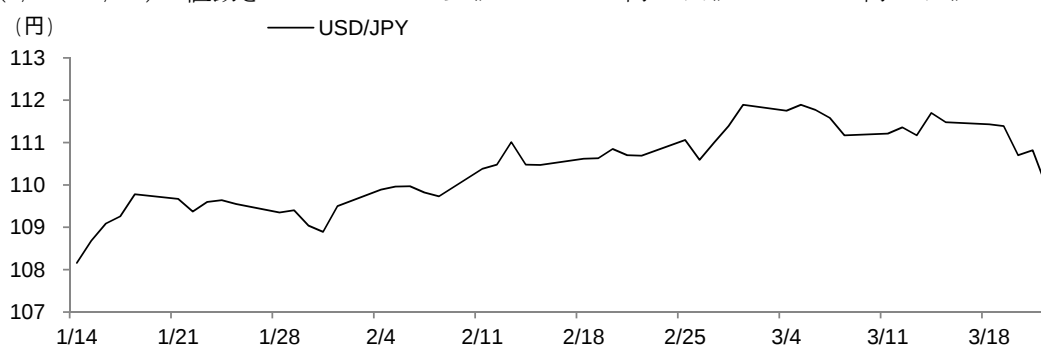
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週半ばに大きく下落した。週初18日に111円台半ばでオープンしたドル/円は、前週末の米国株上昇を背景に日経平均株価が堅調に推移したことから円が売られやや上昇した。しかし、小幅高で推移していたNYダウ平均がマイナス圏へ下落する展開にクロス円の売りが優勢となり、ドル/円も111円台前半まで値を下げた。19日は寄り付きの日経平均株価が反落したのを横目にドル/円は売りが先行しやや下落したが、欧米金利が上昇する動きに111円台半ばまで値を戻した。その後は、米中通商協議で中国側が米国の要求に抵抗し、合意に向けた協議の進展は鈍いと報じられると111円台前半まで下落する場面も見られた。20日は五・十日のドル買いフローを受けて一時週高値となる111.70円をつけたが、注目のFOMCでは年内の利上げを見送る見通しが示され予想以上にハト派との見方が広がり110円台まで急落。続いて開始されたパウエルFRB議長の記者会見も全体的にハト派な印象で110円台半ばまで続落した。21日は前日の流れを引き継ぎ一時110.30円をつけたが、米3月フィラデルフィア連銀景況指数が予想を上回ったことを受け反発。その後は安寄りした米株がプラス圏に回復したことや米金利の上昇にサポートされ111円台手前まで値を戻した。22日は前日の流れを引き継ぎ底堅い展開が続いていたが、独3月製造業PMIが2012年以来の低水準となり市場予想も下回ったことで欧米金利が急低下し、ドル/円も一時週安値となる109.75円をつけた。その後は米2月中古住宅販売件数が予想を上回ったことから一旦下げ渋ったものの、米株の下落に連れてドル/円も再び110円割れとなり109円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週のFOMCは金利見通しにおいて2019年の利上げ予想が2回から0回に引き下げられたほか、バランスシートの縮小ペースが5月から減速し9月には停止する等、予想以上のハト派な結果となり、米金利は大きく低下した。FRBのハト派姿勢が改めて意識される中ドルは買いづらい状況が続くであろう。また米中通商協議については今週閣僚級協議が予定されているが、米中首脳会談が後ろ倒しになっている中、あまり材料視されない可能性が高くドル買い材料にはなりにくいと考え。今週はドルに関して目立ったイベントはなく、ブレクジット関連のヘッドラインや年度末の実需フローで振られる場面はあるものの、上値の重い展開を予想する。

(3)先週末までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き: 安値 109.75 円 高値 111.70 円 終値 109.94 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.1350 123.00 ~ 125.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは、対ドルでは上昇後に下落、対円でも序盤の底堅い展開から週末にかけては急落を見せた。週明け18日、1.13台前半でスタートしたユーロ/ドルは、週半ばにFOMCが控えることから全体的に様子見姿勢が強く、フロー主導の値動き。欧州時間入り後に実需勢の買いが入り1.13台半ばまでじり高となるも、スเปック勢のユーロ/円の売り等に上値を押さえられ1.13台前半に反落した。ユーロ/円についても126円台前半から126円台半ばまでの小幅な往って来いとなった。19日、ドイツ3月ZEW期待指数が市場予想を大きく上回ったものの反応薄、Brexitに関してポンド買いが強まったタイミングではユーロもやや買い優勢となるも特段方向感が出るには至らず1.13台半ばで揉み合い。ユーロ/円はドル/円の底堅さを横目に126円台前半から126円台半ばまで堅調推移した。20日、事前予想を上回るハト色の強いFOMCにドル全面安の展開となるとユーロ/ドルは1.13台半ばから一時、週高値となる1.1448まで急騰。その間のユーロ/円は、ユーロ/ドルの上昇がドル/円の下落に相殺されるも、こちらも週高値となる126.78円を付けた。21日、ユーロ/ドルはポンドに連れ安となると、利益確定の売りも重なり1.14割れ。北米時間に米経済指標が市場予想比強い結果となると米株上昇、米金利反転上昇、ドル買いの流れに、ユーロのロングスクウィーズが一段と強まると一時、1.1343まで続落、その後1.13台後半にやや反発した。ユーロ/円も同様に126円台半ばから一時、125.70円まで1円弱下落後、126円絡みまでやや反発した。22日、フランス・ドイツ・ユーロ圏の製造業PMI速報値が軒並み市場予想を下回ったことからユーロは対主要通貨で全面安の展開。ドイツ10年債利回りが2016年10月以来となるマイナス圏に沈んだことも材料視され、1.13ちょうどを下抜けると一時週安値となる1.1274まで大幅下落。ただし、北米時間に米株安、米金利低下にドル売りが強まった為、1.13絡みまで反発し越週した。対円では前述のユーロ圏の経済指標悪化に起因するユーロ売りに加えて、米株安、米金利低下を背景としたリスク回避的な円買いも相俟って123.83円まで売り込まれ、戻りも鈍く124円台前半の安値圏で越週した。

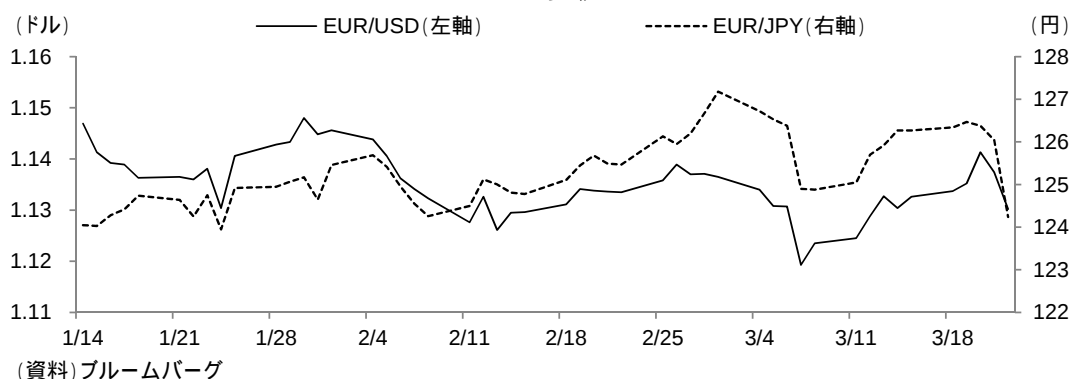
今週の、ユーロ相場は対ドルでは方向感の出ない展開、対円では上値の重い推移を予想する。前週のFOMCにてFEDのハト派姿勢が確認されたことはユーロ/ドルのサポート材料であるものの、弱い製造業PMIに対するビビッドな反応を見ても欧州域内の経済減速懸念が強いことが窺え、ユーロ買いが強まることは考えにくい。ユーロ/ドルは、足元で注目度の高いBrexit関連のヘッドラインに一喜一憂するポンドを眺めながらの主体性に乏しい展開を予想する。一方で、世界的な景気減速懸念が強まりつつある環境下、リスクオフの円買いを念頭に置くとすれば、ユーロ/円についてはダウンスайдにバイアスがかかりやすい。ただ、株価がもちこたえるようだとショートカバーも見込まれる。経済指標としては、25日(月)ドイツ3月Ifo景気動向指数、28日(木)ドイツ3月消費者物価指数速報、29日(金)ユーロ圏3月消費者物価指数速報等が発表される他、27日(水)にはドラギECB理事、ノボトニー・オーストリア中銀総裁、プラートECB専務理事、ラウテンシュレガー・メルシュ両ECB理事等、相次ぐECB高官の講演内容も確認しておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1274 高値 1.1448 終値 1.1300

(対円) 安値 123.83 高値 126.78 終値 124.24



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3050 ~ 1.3350 144.00 ~ 148.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨全般に対し明確な全面安が先行したが、週を振り返ると、対ドルで小幅安、対円で安値膠着、対ユーロでは概ね横這いと、それぞれの値動きは分かれた。各通貨に対するポンドの反応が分かれたのは、主要通貨同士の強弱の反映と言えたが、この間、最も買われたのが円、続いてドル、最も売り込まれたのがユーロという序列で、ポンドはユーロ並みに弱かったということができた。主要通貨の中で最初に動きを見せたのはポンドだった。18日、英下院バーコウ議長は、メイ首相の離脱合意の是非を問う下院投票、所謂「意義のある投票」は、149票差で否決された第2回目投票の内容から「本質的な変更」がない限り、3回目の投票には掛けられないとの所見を述べた。「合意なき離脱」の可能性が高まると受け止めればポンド売り、離脱期限延期申請が確定的になると受け止めればポンド買いと読めたはずだが、当初小幅下落したポンドは、ほどなく反発。結局、20日の欧州時間まで、主要通貨全般は方向感に乏しい膠着を支配的とした。その後、分り易い値動きとしては、20日発表された米連銀公開市場委員会の結果を受けたドル安や、22日発表された独仏ユーロ圏3月PMIを受けユーロ安が見られた。円堅調は、消去法的な円高とも言えたが、22日になって株価全般が下落、更に、トルコ・リラが急落すると、リスク回避の円高の色彩を強めた。並行して、19日には英11~1月雇用統計、20日には英2月CPI、21日には英2月小売売上高などの英主要経済指標が発表され、21日には英中銀金融政策委員会の決定も公表されたが、ポンドの関心は離脱交渉に集まっており、要因と結果をはっきりと結び付けられる値動きはほとんど見受けられなかった。

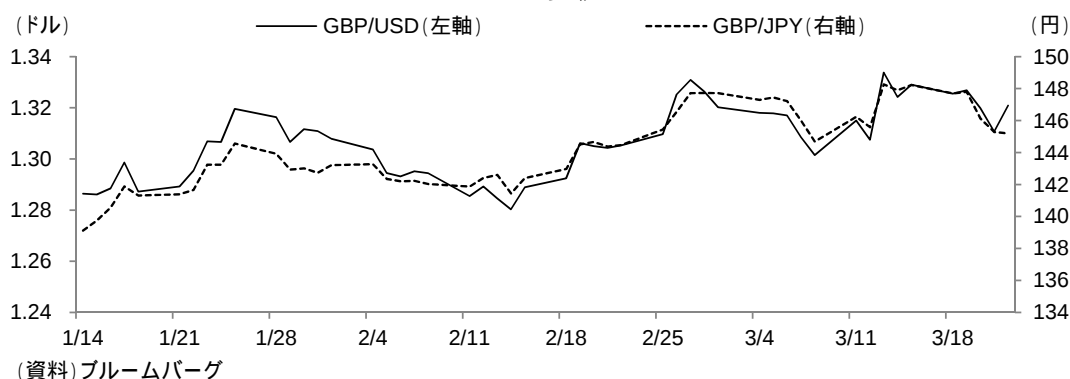
今週の英ポンド相場は、EU離脱を巡る今後の方針に振り回される展開を予想。引き続きその先行きは極めて不透明だが、ひとつだけ確度が高いのは、観測や思惑に振り回されたボラティリティの上昇が警戒される点だ。21/22日に開催された欧州理事会(サミット)は、英政府の離脱延期申請を受け入れ、4月12日までの無条件延期を認めた。同日までに英下院で合意が成立すれば、法手続きなどを済ませる時間的猶予として、更に5月22日までの延期を容認。ただし、合意がまとまらなければ、欧州議会選(5月23~26日)に候補者を擁立するか否かの決断をしなければならないとした。仮に欧州議会選に参加しないのであれば、4月12日の時点で「合意なき離脱」、参加するのであれば長期延期を前提とした今後の方針が再検討されることになる。先週の欧州理事会では、延期の枠組みは決められたものの、そもそもの離脱合意に関しては議論がなかった模様。上述、バーコウ議長の所見に鑑みれば、3回目の「意義のある投票」が実施できる可能性は低く、早晚、議会主導で(政府主導ではなく)提案毎に下院の意向を諮る投票(インディカティブボート)が開始される可能性が高い。穏健残留派とも「隠れ離脱派」とも見做される最大野党労働党のコービン党首が、再国民投票実施への支持を固めれば、その過程で、同投票実施の可能性が本格的に浮上し、ポンド上昇を促す可能性が考えられる。仮に、同党首があくまでも解散総選挙に固執するようであれば、不透明感の高まりをポンドが嫌気する可能性が高い。関税同盟などに残留する方針を、議会の総意として確認できた場合には、それが英経済に中長期的な恩恵をもたらすとは考え難いものの、合意に基づく離脱に向けた前進と受け止められ、少なくとも短期的にはポンド押し上げ要因と読まれよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3004 高値 1.3311 終値 1.3212

(対円) 安値 144.14 高値 148.39 終値 145.19



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 原田 直彦

(1) 今週の予想レンジ: 0.6950 ~ 0.7200 77.00 ~ 79.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.71を挟んで揉みあう展開となった。週初、0.7080近辺でスタートした豪ドルは18日、株式市場が全般に堅調な中で小幅上昇、週央に控えているFOMCのハト派観測も豪ドルのサポート材料となり、0.71台前半まで上昇した。19日、豪10～12月期住宅価格指数は、予想よりもマイナス幅を拡大と弱めの内容となったが市場の反応は限定的、また豪3月豪州準備銀行(RBA)会合議事録の内容についても特段目新しい材料はなく、0.71を挟んで揉み合う値動き。20日は、RBA総裁補佐から金融安定に係る懸念事項として住宅価格の下落を指摘とのヘッドラインが出る中で0.7060近辺まで下落したものの、下値は底堅く徐々に買い戻される展開となった。迎えたFOMCでは、予想よりもハト派との見方から全般的にドル売りとなる中で豪ドルも上昇し、0.7150近辺まで上昇した。その後は0.71台前半まで押し戻されたものの、21日にRBAが今後の経済動向を占ううえで重要としている豪2月失業率が強めの内容となると、再度豪ドルは0.7160近辺まで上昇し、3月の高値をつけた。その後は全般的にドルが買い戻される動きのなかで、豪ドルも下落し、株式市場も下落に転じるなかで0.7080近辺で週の取引を終えている。豪ドル円については円高方向への推移。週前半は、堅調な株式市場に支えられ豪ドル円も底固く推移し、79円台半ばで推移。週半ばにかけて、豪ドルが緩む場面では79円を割り込む場面もあったものの、強めの豪2月雇用統計を受けて再び79円台を回復。しかし、週後半の株式下落局面で、ドル円が大きく下落したことから、豪ドル円も77円台に下落した。

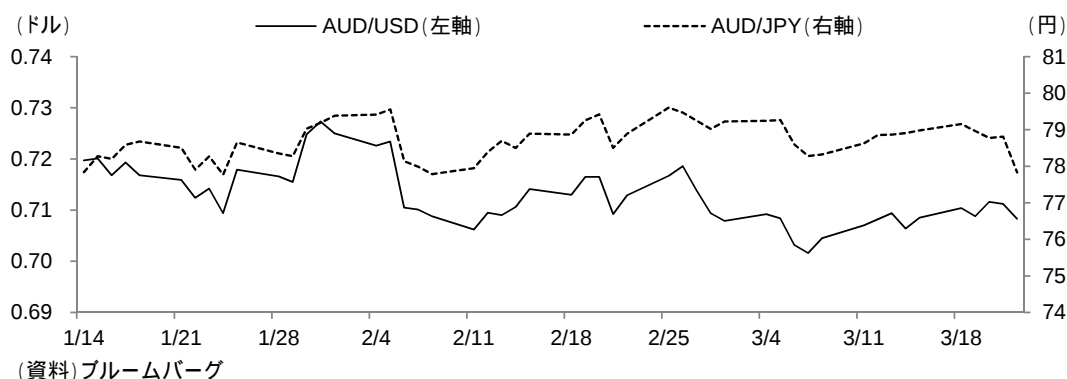
今週の豪ドル相場は0.71を中心としたレンジ内での値動きの継続を予想。先週は、FOMCにおけるハト派スタンスからのドル売りの流れ、予想対比強めの豪2月雇用統計と豪ドルにとっては買い材料が続いたが、上昇幅は限定的で週間を通してみれば、小幅な値動きに留まっている。金融政策に係る見通しについては、据置きと利下げの間で見方が分れているものの、依然として金利市場では先行き1年間で1回以上の利下げを織り込んでいる状況下、多少の好材料が出た場合でも豪ドルはなかなか上昇しづらい。RBAは依然として、景気認識については鈍化傾向ながら政策金利については中立とのスタンスを維持しており、為替動向は米中間の通商問題、ブレグジットの行方に影響をうけるグローバル経済の動向、また特にRBAが重要としている豪州国内の労働市場の状況を確認しながら、政策変更についての手がかりを探る動きが継続しよう。特に今週は目立った国内材料が無いため、海外の材料を見ながらの展開を予想する。なお、週末のニューサウスウェールズ州の選挙では与党が政権維持。5月に控える連邦総選挙では労働党の優勢が伝えられており、仮に労働党が勝利の場合は、景気について若干ネガティブな影響を与えると見られている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/18～3/22)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7058 高値 0.7168 終値 0.7080

(対円) 安値 77.78 高値 79.42 終値 77.84



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。